



ソロフェスタ・ディつくば
2013

9月22日(日)

13:30開場 14:00開演

つくば市アルスホール

外部委員 横山 和彦氏(東京学芸大学教授) 見角 幾代氏(Saal 194 主宰)

主催 つくば音楽団体交流協議会 (会長・コンサート委員長 五十嵐 滋)

事務局(問い合わせ先)

堀部 一寿(コンサート委員)

FAX 029-852-3721 電子メール horibe@piazza-arte.com

主催者御あいさつ

ソロフェスタ・コンサート委員長
つくば音楽団体交流協議会会長
筑波大学名誉教授 五十嵐 滋

皆様、第一回の“ソロ・フェスタ”によろしくお出で下さいました。日曜日の午後の一時、声楽と器楽のソロをお楽しみください。

この“ソロ・フェスタ”は、20年前から茨城県南地区の有力合唱団が年一回一堂に会して行われている“ムジカフェスタ・ディつくば”を主催しているつくば音楽団体交流協議会が、その“ムジカフェスタ”を補完するために2年前から計画して来たものです。準備的な非公式な夏のコンサートを2011年8月(アリスの茶屋)に開いて好評を得たことに基づき、昨2012年度に公式開催予定でしたが、準備と会場の手当が間に合わなかったため、本年度に持ち越されたわけです。

“ムジカフェスタ”の前身は1970年代半ばの筑波大学創設時から、同大学の学生会館がつくば地域唯一の良好な音楽ホールだったため、地域の芸術文化活動の推進のために、創設期の教員の要望に応じて大学が予算措置を講じ全経費を負担して開催していた“学園都市音楽会”です。1980年代半ばになるとノバホールが出来て評判も良くホール運営も軌道に乗ったため、1990年代初頭に第50回を以って役割を果たしたとして終了することになったわけですが、その際、諸団体のメンバーとして学園都市音楽会に出演するだけでなく、実施について会館の事務方を助けていた筑波大教員・学生OBの有志を中心にして、地域で音楽活動を始めて居られた堀部一壽さん等の音楽家の協力を得て発展的に継承されたのが“ムジカフェスタ”です。

“学園都市音楽会”は、こうした経緯から当然のこととして地域のプロ、アマが混じっており、器楽、合唱、ソロの3部門に分かれて年3回開催されていました。つまり創設以来の理念として、プロ、アマや団体と個人や演奏ジャンルの垣根を超えた地域住民の音楽芸術の発表の場だったわけです。

“ソロ・フェスタ”は、今後もこの“ムジカ・フェスタ”の一環として開催して行くことになっておりますので、引き続き皆様のご協力をお願い致します。

今日は、プログラをご覧になれば分かるように、お陰様で、皆様に誇れる出演者を揃えることが出来ました。またストレッチを兼ねて、一昨年に好評だった、皆様と一緒に歌うプログラムも途中と最後に入れてありますから、最後までごゆるりとお堪能くださいますように。

プログラム

1. 五十嵐 滋(テノール) 横山 美恵(ピアノ)

歌劇「愛の妙薬」より「人知れぬ涙」

作曲 ドニゼッティ

“L' Elisir d' Amore” ~ Una furtive lagrima

Donizzetti

歌曲集「冬の旅」より 菩提樹

作曲 シューベルト

“Winterreise” Op. 89 ~ Der Lindenbaum

Schubert

忘れな草

作曲 デ・クルティス

Non ti scordar di me

de Curtis

2. 仲田 ちよ子(ソプラノ) 水村 香代子(ピアノ)

アベ・マリア

作曲 カッチーニ

Ave Maria

Caccini

くちなし

作詞 高野 喜久雄 作曲 高田 三郎

モテット「踊れ喜べ、幸いなる魂よ」より アレルヤ

作曲 モーツァルト

“Exsultate, jubilate” K.158a ~ Alleluia

Mozart

3. 池田 由紀子(ソプラノ) 中山 ちあき(ピアノ)

郷愁

作詞 ハインリッヒ・ハイネ 作曲 チマーラ

Nostalgia

Heinrich Heine

Cimara

歌劇「カルメン」より「不安にさせるものなどない」

作曲 ビゼー

“Carmen” ~ Je dis que rien ne m'epouvante

Bizet

4. 柿沼 美美子(リコーダー) 桑原 香織(ピアノ)

ソナタ「忠実な羊飼い」第6番 Sonata No.6 “Il Pastor Fido”

作曲 ヴィヴァルディ

Vivace - Fuga de capella - Largo - Allegro ma non presto

Vivaldi

5. 横山 和美(ソプラノ) 横山 美恵(ピアノ)
歌劇「魔笛」より パミーナの aria「ああ、幸福は全て消え去り」
“Zauberflöte”～Ach,ich fühle's,es ist verschwunden
作曲 モーツァルト
Mozart

6. 横山 美恵(ピアノ)
愛の夢 第3番
Liebestraume Nottornos No. 3
作曲 リスト
Liszt

休憩 … 会場の皆さんと歌おう(Ⅰ) 小さい秋みつけた

7. 岡田 美奈子(ソプラノ) 村田 果穂(ピアノ)
春の朝(レアンドー)
Frühlingsmorgen(R.Leander)
作曲 マーラー
Mahler
「子供の不思議な角笛」より 夏の歌い手交代
作曲 マーラー
Mahler
“Des Knaben Wunderhorn”～Ablösung im Sommer
「子供の不思議な角笛」より 別離
作曲 マーラー
Mahler
“Des Knaben Wunderhorn”～Scheiden und Meiden

8. 堀部 一寿(バリトン) 桑原 香織(ピアノ)
うた
波浮の港
歌劇「フィガロの結婚」より フィガロの aria「もう飛ぶまいぞこの蝶々」
“Le Nozze di Figaro”～Non Piu Andrai
作詞 佐藤 信 作曲 林 光
作詞 野口 雨情 作曲 中山 晋平
作曲 モーツァルト
Mozart

9. 山口 久美子(フルート)
歌曲集「美しき水車小屋の娘」より
涙の雨
水車屋の花
「8つのユーモレスク」より
第7曲
作曲 シューベルト
Schubert
作曲 ドヴォルジャーク
Dvorak

10. 岡野 雅代(ソプラノ) 横山 美恵(ピアノ)
「白いうた 青いうた」より
わらべが丘
アルデバラン
ぶどう摘み
砂よ
詩 谷川 雁 作曲 新実 徳英

11. 横山 和美(ソプラノ) 横山 美恵(ピアノ)
歌劇「運命の力」より レオノーラの aria「神よ、平和を与えたまえ」
“La forza del Destino”～Pace,pace mio dio
作曲 ヴェルディ
Verdi
歌劇「道化師」より ネットダの aria「鳥の歌」
作曲 レオンカヴァルロ
Leoncavallo
“I Pagliacci”～Stridono Lassu

会場の皆さんと歌おう(Ⅱ) 野ばら、他

出演者プロフィール

五十嵐 滋 (いがらししげる)

声楽を竹前ケイ、横山和彦両氏に、アコーディオンを渡辺弘氏に師事。音楽理論を東京藝大旧通信課程で学ぶ。横浜博つくば市デーで「忘れな草」を歌う。近代詩曲の会主宰(創設した合唱団の一つの“銀の笛”は10年間ノバホールで定期演奏会を成功させた)。旧桜村とつくば市ではルネッサンス専門の“もくせい会”と男声合唱団“KOΣMOΣ”(創立メンバー)でも長年歌った。つくば市文化祭音楽会の役員を多年努めて、堀部一壽氏と協力して現行の二日開催を実現させた他、つくば市カピオ・ホール設計市民ワーク主査、つくば音楽団体交流協議会の創設時の会則起草者(現在会長)、筑波大学・市民交流音楽会を同大会館で数回主催する等、つくば市及び近隣地域に於ける音楽活動の発展に努めて来ている。筑波大学名誉教授。著書『演奏を科学する』(ヤマハ・ミュージック・メディア社刊)

仲田 ちよ子 (なかだちよこ)

中学・高校(土浦第二高校合唱部)から合唱に心を寄せられ、現在に至るまで40数年間歌い続けている。今までの所属合唱団は、ド・ラ・ゴエーズ(旧土浦混声合唱団)、現在は、土浦市民合唱団とつくばフィルハーモニー合唱団に所属している。昨年12月には、イタリア(ナポリ・アベリーノ)で歌って来た。8月には土浦でオペラ小町百年の恋の中で村人として出演した。声楽は、30代から本格的に勉強し、若林啓代・島田佳子・佐藤あけみ各氏に師事。年2回の魔法使いの弟子コンサートはじめ、プサルタリーとギター伴奏で、土浦・牛久・取手・つくばなどで歌っている。土浦市民合唱団では、ソプラノソロを歌っている。土浦市出身。聖徳短期大学(保育科)卒業。

池田 由紀子 (いけだゆきこ)

2005年、2007年、茨城県芸術祭県民コンサート(1)に出演、2010年には特賞受賞、2011年は賛助出演。2009年、国際芸術連盟主催の第6回東京声楽コンクールにて3位入賞。2009年8月同連盟主催コンサート『エクセレントステージ in Tokyo』(けやきホール)に出演。星洋二、濱田千枝子、堀部一壽の各氏に師事。

柿沼 芙美子 (かきぬまふみこ)

リコーダーを堀部一壽、吉沢実、永田仁の各氏に師事。声楽を堀部一壽、田嶋喜子の両氏に師事。土浦市やつくば市の音楽会に合唱やリコーダーアンサンブルなどで、多数参加。土浦市のボランティアグループ「よしきり会」に所属して、老人福祉施設を定期的に訪問し、演奏をしている。土浦市民合唱団、アルテファミリー合唱団所属。

横山 和美 (よこやまかずみ)

第62回全日本学生音楽コンクール声楽部門高校の部全国一位、同時に横浜市民賞受賞。第82回春の選抜高校野球大会開会式において甲子園で、2009年世界卓球選手権開会式において横浜アリーナで君が代を独唱し、ともに絶賛される。高校時に東洋英和女学院大学死生学研究所主催の「オルガンと歌によるレクチャーコンサート」などをはじめとする多数の演奏会に出演。また、同校卒業時に長野賞受賞。大学2年次に、隔年開催の東京音楽大学コンクール(声楽に)最年少で第3位入賞。本年は大学を代表し、「音楽大学フェスティバル」に出演者唯一のカーテンコールを受け絶賛される。東京音楽大学給費奨学生、明治・安田生命クオリティ オブライフ奨学生。現在、東京音楽大学声楽演奏家コース3年に在籍中、声楽を水野賢司氏に師事

横山 美恵 (よこやまよしえ)

武蔵野音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。松崎玲子、塚越淑子、高橋高子氏に師事。結婚後ウィーンに留学、ワルター・モーア教授の薫陶を受ける。帰国後は子育て、後進指導の傍ら、和彦、和美の伴奏者として数多くの演奏会に出演。現在コールブリランテにて伴奏を務める。

岡田 美奈子 (おかだみなこ)

広島市出身。愛知県立芸術大学音楽学部声楽専攻卒業。同大学定期演奏会、卒業演奏会に出演。広島市新人演奏会に出演。92年よりウィーンに留学。声楽とピアノ伴奏法を学ぶ。帰国後、合唱団のヴォイストレーナー、練習ピアニストなどを務める。広島にてソプラノリサイタル(98年)、デュオリサイタル(02年)を開催。現在は、つくば市でアンサンブル「音の玉手箱」の一員として演奏活動をしている。声楽を小島琢磨、戸山俊樹、H.レッセル＝マイダン、中田淳子の各氏に師事。

堀部 一壽 (ほりべかずとし)

声楽を、西義一、沢木和彦、F.アルバネーゼ、B.ダルモンテ、M.アルジェント、松永ちづるの各氏に、リコーダーを吉沢実氏に師事。イタリアのミラノに1年間留学。帰国後、多数のオペラに出演する他、リサイタル活動などを行う。現在、つくば市天久保の音楽教室にてヴォイストレーニング、リコーダー、などの指導をする他、クラシックからポピュラー、ゴスペル、アカペラ、シャンソン、童謡など様々なジャンルの13の合唱団、6つのリコーダーアンサンブルの指導などを通じ、音楽の楽しさを伝える活動を行っている。現在は、歌から派生して「健康」にも興味を持ち、「リンパ整体院かえる」にて整体師として多くの方の施術にあたっている。

山口 久美子 (やまぐちくみこ)

武蔵野音楽高校、武蔵野音楽大学卒業。1991年9月～1992年3月 ピアツツァ・アルテ音楽教室フルート講師。2002年～2009年 つくば市文教施設ゆかりの森フルート講師。2003年～2010年 ヤマハ音楽教室ひたちのうしく店フルート講師。現在、専業主婦。

岡野 雅代 (おかのまさよ)

2001年柏市での「ジョイントコンサート」を皮切りに東京・横浜・川崎・守谷・志木・松戸など各地でリサイタルやコンサート活動を展開。筑波メディカルセンター、横浜市立脳血管医療センター、県立がんセンター、川崎社会保険病院、その他病院・老人施設・保育園でボランティアのコンサートを行う。(公益社団法人)シャンティ国際ボランティア会の会員として、ラオス・カンボジア・ミャンマー難民キャンプなどを訪れて歌を通じて子供たちと交流する。音夢の会を松永さんと主宰し、これまでに県南を中心に30回以上のコンサートを主催。ヨーロッパスズキ協会認定Suzuki Voice Teacher 及びスズキメソードピアノ科指導者。これまでに田村省平、柴田喜代子、森敏孝、河野美年子(故)、児井恵各氏に、現在は日本歌曲を瀬山詠子氏に師事。活水女子短期大学音楽科声楽専攻卒。

楽曲紹介

「人知れぬ涙」・・・甘いテノールの定番のアリアの一つ。恋人への思いを気弱な若者が切々と歌う。

「菩提樹」・・・作曲された当時から「冬の旅」の中で唯一つ、普通の雰囲気のアラビヤの安らぎと美しさに満ちた作品と評されて、合唱にも編曲されて愛唱されてきた歌。

「忘れな草」・・・タリアビーニの名唱で一世を風靡したテノールの歌。一時は定番だった。作曲者のデ・クルティスは史上初のコマーシャル・ソングとも言われる「帰れソレントへ」を作った人。意味が伝わるように、最初日本語で歌います。

「郷愁」・・・夕べにねむれる森へ 疲れてゆく時 私のそばにお前の繊細な姿が見えるようだ。白く見えるお前のヴェールなのか？お前の愛らしい顔か？松の茂みの月明かりなのか？でも、そっと聞こえるのは、私の涙の流れる音か？それとも、本当にお前が私について来てこんなに泣いているのだろうか？

「不安にさせるものなどない」・・・山奥の暗く恐ろしい密輸団の隠れ家にカンテラを下げたミカエラが独りやってくる。婚約者のホセに会うよう彼の母に頼まれたためだ。必死で彼女は自分に言い聞かせていた。恐れるものなどない。彼を卑劣な男にしてしまったあの危険な女、カルメンに会って話そう。神様、私にどうか勇気をお与えください。お守りください。

「忠実な羊飼」ソナタ第6番・・・フルートと通奏低音のために作曲された最もよく知られたソナタですが、最近、フランスの作曲家ニコラ・シエドヴィルが、ヴィヴァルディの名で、楽譜を出版したらしく、偽作であるとする説が有力になっています。

6曲ありますが、第6番は唯一の短調曲で私の一番好きな曲です。第4楽章の速いテンポの動きが難しく、一時やめようと思いましたが、第3楽章のラルゴの美しさにひかれて、再度挑戦してみました。

「ああ、幸福は全て消え去り」・・・モーツァルトの最後のオペラ。ヒロイン、パミーナはザラストロから沈黙の試練を与えられ、彼女につれない態度をするタミーノを誤解し、歌うアリア。静かな情感でありながら幸福が消え去ってしまったことを切々と歌い上げる、モーツァルトの曲の中でも屈指の抒情的なアリア。

「愛の夢」第3番・・・もともとは歌曲として作られたリストの曲の中でも特によく知られた名曲。穏やかなフレーズから始まるが、やがて華やかなアルペジオに支えられた情熱的な中間部を迎える。そしてその激しい愛の炎はやがて元の穏やかな火へと戻っていく。リストの表現はどれも派手で濃厚ですが、この曲はそんなリストの特徴を持っています。

「春の朝」・・・マーラー（1860－1911）が20歳の頃の作品。「お日様も昇って、鳥も虫も起きだしているよ。起きたらどうだい！君の恋人ももう見かけたよ。起きたらどうだい、お寝坊さん。起きたらどう？」と春の眠りの中にいる恋人をやさしく起こしている。

「夏の歌い手交代」・・・マーラーが好んで用いたカッコウの歌声を盛り込んだ、印象的なメロディーの曲。のちに交響曲第3番の第3楽章の主題に転用している。「カッコウが死んでしまった！ いったい誰がこの夏の間、僕たちの暇つぶしをしてくれるのだろうか」「それはナイチンゲール夫人さ。彼女は歌うし踊るし、ほかの鳥が黙ってしまってもにぎやかだ」

「別離」・・・勇ましい騎馬のリズムに乗せて、別れの情景が力強く歌われている。3人の騎士が城門から駆けて行った。「アデュー！」きれいな乙女が窓から見送る。「これがお別れというなら、あなたの金の指輪をくださいな。」「アデュー！」「いつになったら愛する人と一緒になれるのかしら。明日がだめなら今日でも良いのに！ そうしたら、二人にはこの上ない喜びなのに。ああ、別れて会えないのはなんと辛いこと！」

「うた」・・・演出家、佐藤信氏の“うたは何処で憶えた？”で始まる4連の詩。1連は母の背中で聞いた子守唄、2連は小学校で覚えた「ローレライ」、3連は昭和34年に水原弘が歌って第1回レコード大賞をとった昭和歌謡「黒い花びら」、4連は「インターナショナル」と並ぶ労働歌の代名詞「ワルシャワ労働歌」。日本では1969年、東大の安田講堂が機動隊により封鎖解除された時のことを彷彿とさせる。

「波浮の港」・・・野口雨情は、大島に行ったことがなく、故郷・北茨城の平潟港から想を得て詩を書いたものといわれます。そのため、実際とは異なる点がいくつかあります。たとえば、大島に鶴はいないし、「なじよな」は大島弁ではなく、「どんな」の意の北茨城弁だそうです。

「もう飛ぶまいぞこの蝶々」・・・歌劇「フィガロの結婚」は、「セヴィリアの理髪師」の後編となる喜劇です。フィガロは、女ぐせのよくない伯爵の従僕であり、伯爵夫人の小間使いスザンナと婚約していますが、伯爵が彼女にちょっかいを出したことで、一騒動が起こります。伯爵の小姓であるケルビーノは、あらゆる女性に興味と憧れを抱く思春期の美しい少年。伯爵の怒りに触れて軍隊行きを命じられたケルビーノをフィガロが、からかい歌います。「涙の雨」、「水車屋の花」・・・シューベルトが26才の時に完成した歌曲集「美しき水車小屋の娘」第18曲「しほめる花」の主題による序奏と変奏曲作品160は、フルート唯一の作品である。チフスにかからずもって長生きしていれば、フルートの曲をもっと作曲したことでしょう。この歌曲集の第10曲「涙の雨」、第9曲「水車屋の花」をピアノ伴奏の和声から、単旋律で私なりに表現してみました。

「8つのユーモレスク」より「第7曲」・・・ドヴォルジャークが53才のときに完成したピアノ曲集「8つのユーモレスク」の中の第7曲目。（フリッツ・クライスラーによるヴァイオリン用の編曲）家族とボヘミアのヴィソカー・ウ・ブシープラミで夏休みを過ごした時に蒐集した素材（数々の興味深い楽想をスケッチ帳の中に書き溜めていた）を用いて作曲した。

「白いうた 青いうた」・・・気鋭、創作力旺盛の極みにある新実徳英と、人生観照への豊かな眼差しを持つ円熟の詩人・谷川雁のコンビではじめられた「白いうた 青いうた」は、従来の歌曲のありようを根本的に覆してしまった、画期的な歌曲アルバムである。コトバというものに囚われず、まったく自由な発想の中に音楽をつづり、それが音符と言う記号に固定化されたあと、その旋律にことばがつけられるという作業。いわば歌曲の作曲としては、全くの裏返しの方法により、これまでにない未知の地平、領域がひらけてくるのではないか、というこの逆行倒置法で、100曲を目指して発表を続けた。新実の音の事由は発想の中に音楽のあらゆるかたち、内容を探り、谷川はこの旋律、和声、リズムの中から、コトバを入念に選び出した。その言葉の新鮮な切り口のさわやかさは、新実の曲の得失を見事に描き切って、これまでの歌曲作曲法を超えたところで、両者のイメージがさく裂しているのではないか。…この曲集が日本の歌の“たから”となるよう願わずにはいられない。

「神よ、平和を与えたまえ」・・・兄の仇敵であるドン・アルヴァーロを愛してしまったレオノーラ。彼女が行く道はもはや自殺の道しかなかった。その前に歌われるアリア。神への平和の願いとともに、自分の呪われた運命をドラマティックに歌い上げます。

「鳥の歌」・・・町回り一座の看板娘ネツダ、彼女はある町でシルヴィオと恋に落ちる。しかし彼女には育ての親で、今や彼女を自分のものとしているカニオがいるのだった。初老の男の嫉妬に狂った執拗な視線と、自分自身の恋人に対する思いのはざまに立った彼女が、大空を自由に飛び回る鳥へ憧れを込めて歌うアリア